

植民地時代、交易の要衝として栄え、ヒトとモノ、そして情報が多量に往来する土地にあった、ということだけである。

以上、訴訟記録に遺された記述の断片から、現時点で指摘しうることに關してのみ述べてきた。なお現代の民族誌では、先住民社会において「司法解剖」が否定的に捉えられているという報告も見られるなど、検討すべき問題は多い。したがって史料批判をふくめ、事例の詳細な解釈については今後の課題といえる。

平成一四年度早稲田大学史学会
公開シンポジウム

歴史空間における「隣り」の 關係を問う

総合司会 考古学専修 高橋龍三郎
趣旨説明 日本史学専修 新川登龜男

私たちが歴史を見たり、考えたりする場

合、およそ以下のような三つの常識的な発想もしくは方法が無意識のうちに存在しているのではなからうか。その第一は、一國ないし一民族の歴史を単元的な時間系列内の因果・発展・連続關係でもって捉えようとするものである。第二は、現在か過去かの区別はあるものの、大きな国、あるいは強い勢力を誇る民族を中心にして、その中心観と周縁観でもって歴史を解釈しようとするものである。第三は、国や民族などの相互二者關係を視座において、その対立や矛盾を説明しようとするものである。そもそも、これら三つの発想や方法は、それ自体歴史的な産物であり、また、文字資料の保存や残存性にかかわる制約などにも左右されたものであると考えられる。そして、これに基づく研究成果や歴史認識・感覚は、現在、大いなる蓄積と発言力をもっており、有益な歴史的力と化していることも事実である。

しかし、このような歴史的「常識」によって失われたものも少なくないと考えられる。

この「常識」か、むしろ歴史の現実と本質を、そして現在の展望を見失わせることに寄与しているとしたら、それは実に皮肉なことであり、痛ましく哀しいことではあるまいか。今日、地球世界の歴史が様々な条件と關係のもとで動いていることは誰しもか承知できるようになった。しかし、一方では、その地球世界の現在を個別的に、現実的に知ること、そして、その動きの仕組みを理解することは誰しもか容易にできるものではないことも事実となった。それは、世界理論の欠如とか、優れた能力の低下などによるのではなく、まさに上記のような歴史認識・感覚の「常識」が日常的に規制している問題ではないかと考えられる。

このような日常的な「常識」を問い直すことが、本シンポジウムの課題である。そのためには、歴史空間における多面的で重層的な諸關係が歴史を形成し、歴史を突き動かすという視座を日常的に育む必要が求められよう。つまり、第一には、大きな国・民族・勢力を中心にした一元的な時系列内

で歴史を読み解かない。第二に、むしろ逆に、小さな国・民族・勢力に眼差しを向け、その周辺の大小の国・民族・勢力などとの並行的な、同時代的な諸関係を見据えることで歴史の仕組みを照らし出す。第三に、それぞれの二者関係に視野を限定することなく、つねに三者関係以上の複合的な条件と、非連続性などを含むあらたな歴史の要件などに眼を開く必要がある。第四に、歴史における自己と他者、ひいては主観と主観の応酬か各種の歴史的言説に立ち現れてくることへの細心の注意が求められる。

かくして、本シンポジウムでは、上記の趣旨に応えられる恰好の歴史的地域を世界の東西から選び出し、一八世紀以降、現代に至るまでの諸問題をあらたに提示して、その歴史認識・感覚を洗い直そうとするものである。西方の場合は、デンマークとドイツの国境地域に注視して、さらにスウェーデンとの関係などを介在としながら、デンマーク人の意識形成を現在の史的観点から浮き彫りにするであろう。東方の場合は、外

モンゴルに視座を据えて、その民族と国家が中国清朝とロシア、ひいては周辺の小民族などとの諸関係のもとでどのような成り立ち方をするのかを示すことになる。さらに加えて、琉球やアイヌなどに眼を向けることによって、どのような歴史認識・感覚があらたに育まれるのかということかコメントされるであろう。このような具体的で地道な、そして「常識」を相対化する歴史的思考の実践と積み上げこそが、私たちの本当の歴史的力となるのではなからうか。

報告

デンマーク人の対ドイツ意識・ 対スウェーデン意識

西洋史学専修 村 井 誠 人

「小国」デンマークという国民国家の国民にとって、自らの民族的アイデンティティを確定する際にその隣人たる「異民族」の形成する「隣国」がいかなる国家であった

か、あるいは「あるか」はきわめて重要である。「民族的アイデンティティ」は、その形成過程において他者である隣接民族に対する自らの相対的位置付けが大いに意味を持ち、ある決定的時代状況における——ここでは一九世紀の、民族ロマン主義の時代の——極端に言えはそれらに対する「好悪」、すなわち積極的な「同一性」・「相違性」の選択によって形付けられる自己認識である。いわは、隣接民族こそが、民族的自己認識の「鏡」でありうるのだ。

デンマークには、二つの「国境地域」が存在する。しかし、デンマーク国民の意識からすれば、永年、それは一つてしかなかった。それか、二〇〇〇年を契機に明確に「一つ」となって現れたのである。そしてそれゆえに、「本来」の一つだけの「国境地域」の意味合いが鮮明に現れ出て、本報告者のような第三者に「客観的」な分析を許す土壌的背景を与えることとなった。なぜなら、「民族論」を語る際に生ずる情緒的・主観的判断を犯す危険性を、同一条件